

平成21年6月18日現在

研究種目：基盤研究（B）（一般）
研究期間：2006-2008
課題番号：18320082
研究課題名（和文） 地方中核都市在住外国人のための方言教材の開発－その理念の構築と実際
研究課題名（英文） Development of a Japanese Dialect Text for Foreign Learners who Live in Regional Hub Cities- the Construction of Its Doctrine and the Writing of a Textbook
研究代表者 馬場 良二（BABA RYOJI） 熊本県立大学・文学部・教授 研究者番号：30218672

研究成果の概要：外国人留学生が日本で勉学や研究にいそしむには、日常的な生活を円滑に行うことが大切です。そのためには、クラスメートや研究室の日本人、そして、アルバイト先の同僚や上司と日本語で円滑にコミュニケーションをとる必要があります。地方中核都市、ここでは熊本市内に住む外国人留学生を対象に、生活の基盤となる熊本市内方言を学習するためのテキストとそのテキストの会話や練習の音声を作成しました。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成18年度	3,200,000	960,000	4,160,000
平成19年度	2,100,000	630,000	2,730,000
平成20年度	2,600,000	780,000	3,380,000
総計	7,900,000	2,370,000	10,270,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：教材・教員論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本在住の外国人留学生は増加傾向にあり、今後もその増加は続くものと見込まれる。その留学生たちが大学や大学院で勉学、研究に必要な日本語の知識や能力を養成するための教材は、かなり充実してきている。しかし、彼らの勉学、研究を支えるのは日常的な生活である。クラスメートや同じ研究室の日本人、そして、アルバイト先の同僚や上司とのコミュニケーションを支える日本語が大切である。

大学のある地方中核都市の中でも、熊本市は方言の使用場面が多い。その現代熊本市内方言を取り上げ、外国人留学生のための方言テキストを作成することとした。

(2) 方言によるコミュニケーションは、話し言葉によるのが基本である。そこで、熊本方言の音声的な特徴を明らかにする必要があった。できるだけ自然な談話音声を録音、収集し、文字化資料を作成、音声を分析する必要があった。

## 2. 研究の目的

日本語教育機関で学習した初級、あるいは、中級日本語に少しだけ上乘せる形で学習し、それによって熊本市内方言話者とのコミュニケーションが格段に改善されることを目指して方言テキストを作成する。

方言によるコミュニケーションは、話し言

業によるものがほとんどなので、現代熊本市内方言の談話音声を集め、そこからその特徴を抽出する。

現代熊本市内方言を分析することにより、その文法的な特徴を抽出し、考察を加える。

熊本市内在住の外国人留学生や外国人留学生と接することの多い日本人に対して、方言使用に関するアンケート調査を実施し、そこからの知見により方言テキスト作成の方針を決定する。

以上の目的、作業を通して地方中核都市在住の外国人留学生のための方言テキスト作成の理念を構築する。

### 3. 研究の方法

(1)熊本市内在住の外国人留学生に対して、「滞在期間」、「日本語学習歴」、「滞在場所」、「留学目的」、「日常使用言語」、「熊本方言についての知識と使用状況」、「アルバイト先での方言について」、「母語での方言使用状況」、「熊本方言の学習」の8つのカテゴリー、25個の質問からなる、方言使用に関するアンケート調査を実施する。調査票の使用言語は、日本語、中国語、韓国語、英語の4カ国語である。また、熊本市内在住の外国人留学生や日本人学生に対して、熊本市内での生活における方言の役割、位置づけなどについて聞き取り調査を行なう。

(2)できるだけ自然な環境で、熊本方言話者の談話を録音、収集するため、相談しながら話者2人で昔話の筋を思い出してもらい、という方式をとった。録音した音声を文字起こしのためのソフトウェアを使いながら、音声に同期させる形で文字化した。音声、文字化資料ともに、個人情報にかかわる部分は無音にするか「・・・」にするかして、個人情報を守るよう気をつけた。

文字化資料を参考にしながら熊本方言の音声的な特徴を抽出し、記述する。

(3)アンケート調査の結果をもとに、方言テキストを作成する。文末詞など、微細なところでの方言のバリエーションは非常に大きい。ネイティブスピーカーの意見を取り入れながら、それぞれの場面に適して、かつ、教育的な普遍性を兼ね備えた表現、言い回しを見つけるよう注意する。

音声作成の場合も、音声データの分析結果だけでなく、ネイティブスピーカーの語感も重視し、より自然で納得のいく発音、音調を心がけた。

(4)方言テキストには、「コラム」として、「熊本方言の秘訣」、「動詞につく「よる」「とる」」、「熊本方言の敬語」、「文末にくる「けん」」、「文末にくる「たい」、「よか」、「熊本の地名：これ、なんて読むと？」の七つの項目を取り上げ、簡単な説明を加えている。コラムでの説明は簡単であるが、その記述のために

は広く深く調査を進めねばならなかった。その成果は、報告書にまとめている。

(5)本研究のためのサイト「話してみよう！熊本弁」プロジェクト (<http://www.isc.kagoshima-u.ac.jp/hoogen/index.htm>) を立ち上げ、方言テキスト、テキスト音声、談話音声、文字起こし資料、方言分析、その他の成果物、関連資料をすべてアップする。

### 4. 研究成果

#### (1)留学生のための方言教材『話してみらんねさしより！熊本弁』（テキスト音声付き）

①このテキストは、熊本市内に住む中級レベル以上の日本語力を有する外国人留学生が、生活の基盤を築くのに必要な熊本方言を身につけるためのものである。「さしより！熊本弁」というタイトルが示すとおり、「さしより（さしあたり、とりあえず）」これだけ知っておけば、熊本方言らしく聞こえるだろうという表現や文型、言い方をまとめた。

外国人留学生の来日の目的は、日本の教育機関で希望する勉強をすることだが、学校に通う前に生活しなくてはならない。その時に、非常に役立つのが方言である。なぜなら、方言が使えればより深い人間関係を築くことができるからである。しかし、その方言習得のために多大な労力をかけるのでは本末転倒である。ここでは、必要と思われる場面、好まれるであろう表現、文型を厳選し、既習の共通語の上にもう少し勉強すれば方言に聞こえるようになることを目指した。

このテキストは、基本的にクラス用である。熊本方言話者の教師が教えることを前提としている。ただ、コラムも音声もあるので、自習も可能である。

熊本方言話者の教師の中には、このような言い方はしない、こんな熊本弁は使わない、と思う人がいるかもしれない。熊本弁は地域、年齢、性別などにより多岐にわたり、熊本市内に限っても多くのバリエーションがある。私たちは、細心の注意をはらい、代表的なものを取り上げるように気をつけた。

留学生の中には、方言を勉強したくない学生もいることが調査でわかった。クラスで使う場合、教師は気をつけなくてはならない。

②教えてくれる教師がいなかった場合、学習者の周りには日本人の知り合いや学校の同級生に教えてもらうことができる。そうすることによって、このテキストが熊本の人たちとより親しくなるきっかけとなるであろう。

③テキストの構成は、以下のとおりである。記号・用語：教える人が日本語教師ではない場合を考慮し、用語の説明を掲載した。課：質問する、誘う・断る、確認する、伝え

る、説明する、許可をもらう・依頼する、考えを言う。以上七つの機能それぞれを課とした。楽しく学べるよう、イラスト、挿絵、4コマ漫画をふんだんに取り入れた。コラム：熊本方言に特徴的な表現や言い回しについて簡単な説明をした。活用一覧、活用形の使い方：熊本方言での動詞の活用を一覧にし、それぞれの形の使い方や、どこの課に出てくるかをまとめた。索引：熊本方言に特有な表現、言い方をまとめ、それぞれに相当する共通語を併記した。スクリプト：すべての「会話」、「聞いてみよう」を文字に書き起こした。巻末には、「練習しようの解答」も掲載してある。

教室での学習にも自習にも対応できるように、「会話」、「聞いてみよう」を熊本市内方言話者に発話してもらった。その音声は、私たちのサイト「話してみよう！熊本弁」プロジェクト (<http://www.isc.kagoshima-u.ac.jp/hoogen/index.htm>) からダウンロードできる。

④各課は、導入用の会話例1(4コマ漫画)、聞き取り練習用の会話例2、表現の簡単な説明、簡単な練習、応用練習、以上を1まとまりとし、1まとまりから3まとまりで構成されている。

⑤発音、文法項目、語句など、注記が必要だと思われた事項についてはコラムをもうけた。

コラムは以下の七つである：熊本方言の秘訣、動詞につく「よる」「とる」、熊本方言の敬語、文末にくる「けん」、文末にくる「たい」、「よか」、熊本の地名：これ、なんて読むと？。

## (2)研究成果報告書 (DVD)

### ①テキスト班関連

・「方言テキストの目的、対象、構成、使い方」 島本 智美  
ロールプレイなど、あると役立つだろうが量が多くなってしまふということで、教材にいれなかったものをここに加えた。

### ・「方言教材作成に際しての諸問題」

島本 智美  
教材のターゲットは熊本市内方言であるが、その熊本市内方言にも語句、文法、発音に多くのバリエーションがあることがわかった。教材作成の段階、そして、録音の段階でそれらのバリエーションの中から一つ一つより適切なものを選んだ。その他、方言教材作成の過程で生じた問題点の数々とその解決策とをまとめた。これから方言教材を作

ろうという方たちにぜひ参考にさせていただきたい。

### ・「留学生の方言意識—熊本方言テキスト作成のためのアンケート調査から—」

船本 日佳里  
熊本市内の日本語学校、大学に通う日本語学習者 31 名にアンケート調査をした。今回のアンケート調査では、全員から「熊本方言を学習したい」という答えは得られなかったが、アルバイトや日本人との接触の中で必要性を感じ、「学習したい」という「熊本方言」に対する意欲的な学習意識も窺えた。教材の具体的な作成においては、本調査の結果を踏まえ、主に「大学での日本人の友人との会話」、「アルバイト先での上司、同輩、後輩との会話」を「熊本方言を使う場面」として採用し、テキストに盛り込むことができた。

### ・「熊本方言教材開発のための「ヨル」と「トル」の一考察—若者の使用実態を中心に—」

島本 智美  
西日本語方言には、共通語の「ている」に大体相当するアスペクト的な言語要素として「よる」と「とる」がある。西日本語方言のその大きな枠組みと熊本方言の「よる」「とる」とを比較した。また、熊本方言の中においても世代により、二つの使い分けには差異がある。市内の大学に通う学生に聞き取り調査を行った。

### ・「方言教材開発のための熊本方言分析の試み—文末詞タイと、接続助詞ケンについて—」

和田 礼子  
個別方言の文法記述の手法として井上 (2002)「モダリティ」、大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』では「既存の分析(特に標準語の分析)が応用できるところは、できるだけ既存の分析を応用する」(p143)ことを主張している。さらに「標準語などを含む、より一般的な枠組みの中でとらえるべき部分」と「その方言個別の問題としてとらえるべき部分」の見極めの重要性も述べている。本研究は共通語研究の成果を熊本方言タイ及びケン分析に用い、その用法について概観するものである。方法としては熊本方言タイ、およびケンがどのような共通語と置き換えが可能であるか、置き換えることのできる用法と、置き換えることのできない用法は何かについて分析を進める。

そして、この分析に基づき、熊本方言教材「話してみらんね さしより！熊本弁」ではどのような解説を行っているかを提示する。

### ・「熊本方言における力語尾」

吉里 さち子

熊本方言は、西九州方言の特徴を多く有した方言である。その中の形容詞でも、ヨカ、キレイカなど、共通した方言要素の一つであるカ語尾が使われており、熊本方言らしさを醸し出すものの一つとなっている印象が強い。

非熊本市内方言話者が効率よく熊本方言について知り、学習するための教材を作成する上で、熊本方言の形容詞について何をどこまで提示すればよいかについて、考察を深めるため、発話資料をもとに分析を行った。

熊本方言学習教材の利用者として想定している熊本市内の大学等に通う留学生が、最も触れる機会が多いと思われる方言は、熊本方言の中でも特に熊本市内の大学生（本稿では熊本市内青年層とする）の中で使われる熊本方言である。

・「熊本方言の敬語表現に関する調査の方向性について」 甲斐 朋子  
熊本方言の敬語は、表現形式のバリエーションが多く複雑なことで知られている。日本語の敬語という枠組みを踏まえ、今後、調査をするという仮定で、その方向性を絞り込む形でまとめた。

## ②談話班関連

・「談話班報告書」 田川 恭謙  
録音、収集した談話音声进行分析、現代熊本市内方言の音声特徴を記述した。

・談話音声：現代熊本市内方言話者として、熊本市内、および、近郊で生まれ育った若年層男女（大学生、大学院生中心）の談話を15録音した。談話の内容は、2人の話者が話し合いながら、昔話を思い出すというものである。与えられた文章を読み上げると緊張し、自然な発話、とくに、自然な音調が得られない。また、まったくの自由発話では、分析のときに統一性、一貫性が得られない。そこで、昔話をつむぎだすという統制を加え、半統制の談話を録音することとした。

疎の人間関係では方言が出にくい、親の関係では出やすいという仮定に立ち、初対面の2人と親しいもの同士との談話を集めた。

・文字化資料：一つの談話の長さは25分程度。これを文字化しデータベースとした。文字化の際には、大阪大学で音声データを文字化したときに使用した書き起こしの基準を参考にした。とくに、熊本方言の音調をタグ化するときの基準に関しては、新たな議論が必要であった。

データベース化した談話のうち、文字化してあるのは13。

・録音時使用機材一覧：談話録音時に使用し

た機材の一覧。

・文字化資料凡例：録音した熊本市内方言の談話を文字化した際の基準、凡例。

・話者及び談話一覧：話者、および、文字化資料の一覧。

・談話音声を使用した研究方法の手順（例）：具体的なソフト、手順を示し、談話音声を使用した研究方法の手順を紹介する。

・談話タスク A：被験者に談話をしてもらったときのタスク。

・談話タスク B：同上。

・調査票：被験者に関する、データ。

・同意書：被験者の談話に関して、研究目的以外には使用しない、などの文書。

・MultiTrans の注意：談話音声文字化するとき使用するソフト MultiTrans に関する注意。

・その他：音声分析ソフト、設定ファイル。

5. 主な発表論文等：(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

嵐洋子「熊本市方言の音調-若年層話者による名詞の音調について-」、『杏林大学外国語学部紀要』第21号、2009年、査読有

〔学会発表〕(計1件)

和田礼子、馬場良二、甲斐朋子、吉里さち子「即席！方言話者への道□留学生のための方言教材『さしより「熊本弁」』」、日本語教育学会秋季大会、2008年10月、審査有

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

馬場 良二 (BABA RYOJI)  
熊本県立大学・文学部・教授  
研究者番号 30218672

### (2) 研究分担者

和田 礼子 (WADA REIKO)  
鹿児島大学・留学生センター・准教授  
研究者番号 10336349

### (3) 連携研究者

木部楊子 (KIBE NORIKO)  
鹿児島大学・文学部・教授  
研究者番号 30192016

(4) 研究協力者

島本智美 (SHIMAMOTO SATOMI)  
熊本学園大学・非常勤講師

甲斐朋子 (KAI TOMOKO)  
関西外国語大学・留学生別科・非常勤講師

吉里さち子 (YOSHISATO SACHIKO)  
鹿児島大学・留学生センター・非常勤講師

田川恭謙 (TAGAWA YUKINORI)  
大阪大学・大学院文学研究科

嵐洋子 (ARASHI YOKO)  
杏林大学・外国語学部・講師

平田真理子 (HIRATA MARIKO)  
タイ国コンケン大学・教育学部付属学校・日本語教師

木下泰臣 (KINOSHITA YASUOMI)  
熊本県立大学・大学院文学研究科

船本日佳里 (FUNAMOTO HIKARI)  
熊本県立大学・大学院文学研究科

田中翔太郎 (TANAKA SHOTARO)  
熊本県立大学・大学院文学研究科